

昨年、ニューイングランドに旅して、先住民であるインディアンへも思いを馳せましたが、インディアンはほぼ絶滅しているという衝撃的な数字を知りました。ボストンのピーボディ博物館で、見学に来ていたアフリカ系アメリカ人高校生一群は、明るい元気な笑顔で話していて、いずこも同じと嬉しく思ったものです。けれども、市街、電車で見ると黒人の表情には、別の何か感じるものがありました。アフリカ系アメリカ人も知りたいと思い、読んでみました。



アリス・ウォーカー（1944 - ）(左)はアフリカ系アメリカ人の作家、フェミニスト。1983年に著書『カラーパープル』によってピューリッツァー賞 フィクション部門を受賞、と紹介されています。かなり以前に、私は映画化された「カラーパープル」を見ました。主人公が、アメリカ南部の人種差別の世界の中で、ルーツである黒人の持つ音楽性とスピリチュアルな感性を持って、耐え抜いて生きる女性の姿を見た記憶がありました。

ウォーカーはジョージア州出身です。1960年代の公民権運動で、キング牧師から強い影響を受けたと言っています。彼女にとっても、暴力的な奴隷化の歴史、人種差別によって、黒人が非人間化されたこと、いまだに続く差別に、耐えられない思いをもって、現実を描かずにいられなかったのでしょう。『カラーパープル』(1982)では、黒人女性を主人公に人種差別のみならず、黒人の性差別も描きます。貶められた男は、更に弱い立場の女を貶める。恐れている男は、女を縛り、支配する。女としての幸せや喜びはどこにあるのかと彼女は求めて行きます。

『カラー・パープル』の主人公の子どもたちの世代を描いた『喜びの秘密』(1992)では、舞台はアフリカに飛びます。愛したアフリカ女性は、伝統的に、秘密裏に行われてきた女兒の性器切除を受けていました。性生活も出産も危険極まりないものでした。男の快樂、女性支配が目的です。いまだに行われているといいます。ウォーカーはこの悲惨な現実も暴きます。

『父の輝く微笑みの光で』(1998)は性に目覚めた思春期の少女が、愛する人と性の喜びを持つことは許されないとして父親から折檻を受けます。食欲は命を守る喜びであり、性欲は命を燃やす喜びであり、人間に与えられた機能なのに、タブー視されています。純潔を女性に求めるキリスト教文化のなかでの、女性の葛藤を描きます。

『勇敢な娘たちに』(1997)はエッセイ、評論、手紙、詩などを集めたもので、ウォーカーの生い立ちや家族のこと、知人などの交友関係を記し、彼女の思想と活動を果敢に訴える著作です。彼女の母親は「惜しみなく与え尽くす女性」であったようです。愛する母への敬愛の思いがとても強いと思いました。母の尊厳を大切にしたい思いが、ウォーカーを女性の問題への提言、活動へと突き動かしているように思いました。

白人は奴隷とした黒人にキリスト教を教えました。神やイエス・キリスト、サンタクロースは白人でした。ひとりとして良い白人に出会ったことのないウォーカーは、キリスト教の教えを疑問視せざるを得ません。彼女はアフリカ的な精神、魂への関心をもって、自由に、女性を捉えています。アメリカは黒人の歴史を伴っています。いまだ、ひどい屈辱、差別、軽視を受け、服従するように蹂躪されている女性へ、希望を失わないように、と呼びかけています。